

日文阅读太宰治：走れメロス PDF转换可能丢失图片或格式
，建议阅读原文

https://www.100test.com/kao_ti2020/252/2021_2022__E6_97_A5_E6_96_87_E9_98_85_E8_c105_252000.htm メロスは激怒した。必ず、かの邪智暴虐(じゃちぼうぎやく)の王を除かなければならぬと意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊とんで暮して来た。けれども邪にしては、人一倍に敏感であった。きょう未明メロスは村を出し、野を越え山越え、十里はなれた此(こ)のシラクスの市にやって来た。メロスには父も、母もい。女房もい。十六の、内な妹と二人暮しだ。この妹は、村の或る律な一牧人を、近々、花婿(はなむこ)として迎える事になっていた。婚式も近かなのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣裳やら祝宴の御走やらをいに、はるばる市にやって来たのだ。先ず、その品々をい集め、それから都の大路をぶらぶらいた。メロスには竹の友があった。セリヌティウスである。今は此のシラクスの市で、石工をしている。その友を、これからねてみるつもりなのだ。久しく逢わなかったのだから、ねて行くのがしみである。いているうちにメロスは、まちの子を怪しく思った。ひっそりしている。もう既に日も落ちて、まちの暗いのは当りまえだが、けれども、なんだか、夜のせいばかりではなく、市全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になって来た。路で逢った若いをつかまえて、何かあったのか、二年まえに此の市に来たときは、夜でも皆が歌をうたって、まちはやかであった(はず)だが、とした。若いは

、首を振って答えなかった。しばらくいて(あるいは)老(ろうや)に逢い、こんどはもっと、をくしてした。老は答えなかった。メロスは手で老のからだをゆすぶってを重ねた。老は、あたりをはばかりる低声で、わずか答えた。「王は、人をします。」「なぜすのだ。」「心を抱いている、というのですが、もそんな、心を持っては居りませぬ。」「たくさんの人をしたのか。」「はい、はじめは王の妹婿さまを。それから、御自身のお世嗣(よつぎ)を。それから、妹さまを。それから、妹さまの御子さまを。それから、皇后さまを。それから、臣のアレキスを。」「おどろいた。国王は乱心か。」「いいえ、乱心ではございませぬ。人を、信ずる事が出来ぬ、というのです。このごろは、臣下の心をも、お疑いになり、少しく派手な暮しをしている者には、人ひとりずつ差し出すことを命じて居ります。御命令を拒めば十字架にかけられて、されます。きょうは、六人されました。」いて、メロスは激怒した。「呆(あき)れた王だ。生かして置けぬ。」メロスは、な男であった。い物を、背ったままで、のそのそ王城にはいって行った。たちまち彼は、巡(じゅんら)の警吏に捕された。べられて、メロスの中からは短が出て来たので、ぎが大きくなってしまった。メロスは、王の前に引き出された。「この短刀で何をするつもりであったか。言え！」暴君ディオニスに静かに、けれども威を以(もっ)ていつめた。その王のは白(そうはく)で、眉(みけん)の(しわ)は、刻みまれたように深かった。「市を暴君の手から救うのだ。」とメロスはびれずに答えた。「おまえがか？」王は、笑(び

んしょう)した。「仕方のいやつじゃ。おまえには、わしの孤独がわからぬ。」「言うな！」とメロスは、いきり立って反(はんばく)した。「人の心を疑うのは、最もすべきだ。王は、民の忠をさえ疑って居られる。」「疑うのが、正当の心えなのだと、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人は、もともと私のかたまりさ。信じては、ならぬ。」暴君は落着いて(つぶ)き、ほっと溜息(ためいき)をついた。「わしだって、平和を望んでいるのだが。」「なんのの平和だ。自分の地位を守るか。」こんどはメロスが嘲笑した。「罪のいい人をして、何が平和だ。」「だまれ、下(げせん)の者。」王は、さっとをげていた。「口では、どんな清らかな事でも言える。わしには、人の腹の奥底がえ透いてならぬ。おまえだって、いまに、磔(はりつけ)になってから、泣いて(わ)びたってかぬぞ。」「ああ、王は巧(りこう)だ。自惚(うぬぼ)れているがよい。私は、ちゃんと死ぬる悟で居るのに。命乞いなどしてしない。ただ、——」と言いかけて、メロスは足もとにを落し瞬ためらい、「ただ、私に情をかけたつもりなら、刑までに三日の日限を与えて下さい。たった一人の妹に、亭主を持たせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で婚式をげさせ、必ず、ここへって来ます。」「ばかな。」と暴君は、嘎(しわが)れた声で低く笑った。「とんでもない嘘(うそ)を言うわい。逃がした小がって来るといふのか。」「そうです。って来るのです。」メロスは必死で言いった。「私は束を守ります。私を、三日だけして下さい。妹が、私のりを待っているの

だ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この市にセリヌンティウスという石工がいます。私の二の友人だ。あれを、人としてここに置いて行こう。私が逃げてしまって、三日目の日暮まで、ここについて来なかったら、あの友人をめして下さい。たのむ、そうして下さい。」それをいて王は、残虐な持で、そっと北叟笑(ほくそえ)んだ。生意なことを言うわい。どうせって来ないにきまっている。この嘘つきに(だま)された振りして、放してやるのも面白い。そうして身代りの男を、三日目にしてやるのも味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しいして、その身代りの男を磔刑にしてやるのだ。世の中の、正直者とかいう奴(やつばら)にうんとせつけてやりたいものさ。「いを、いた。その身代りを呼ぶがよい。三日目には日没までについて来い。おくれたら、その身代りを、きつとすぞ。ちょっとおくれて来るがいい。おまえの罪は、永にゆるしてやろうぞ。」「なに、何をおっしゃる。」「はは。いのちが大事だったら、おくれて来い。おまえの心は、わかっているぞ。」メロスは口惜しく、地(じだんだ)踏んだ。ものも言いたくなくなった。竹の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君ディオニスの前で、佳(よ)き友と佳き友は、二年ぶりで相逢うた。メロスは、友に一切の事情をった。セリヌンティウスは言で首肯(うなず)き、メロスをひしと抱きしめた。友と友のは、それでよかった。セリヌンティウスは、打たれた。メロスは、すぐに出した。初夏、天の星である。メロスはその夜、一睡もせず十里の路を急ぎに急いで、村へ到着したのは

、翌(あく)る日の午前、は既に高くって、村人たちは野に出て仕事をはじめていた。メロスの十六の妹も、きょうは兄の代りに羊群の番をしていた。よろめいていて来る兄の、疲(ひろう)困(こんぱい)の姿をつけていた。そうして、うるさく兄にを浴びせた。「なんでもい。」メロスは理に笑おうと努めた。「市に用事を残して来た。またすぐ市に行かなければならぬ。あす、おまえの婚式をげる。早いほうがよかろう。」妹はをあからめた。「うれしいか。(きれい)な衣裳もって来た。さあ、これから行って、村の人たちに知らせて来い。婚式は、あすだと。」メロスは、また、よろよろとき出し、家へって神々の祭をり、祝宴の席をえ、もなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。眼がめたのは夜だった。メロスは起きてすぐ、花婿の家をれた。そうして、少し事情があるから、婚式を明日にしてくれ、とんだ。婿の牧人はき、それはいけない、こちらには未だ何の仕度も出来ていない、葡萄(ぶどう)の季まで待ってくれ、と答えた。メロスは、待つことは出来ぬ、どうか明日にしてくれえ、と更に押してたのんだ。婿の牧人もであった。なかなか承してくれない。夜明けまでをつづけて、やっと、どうにか婿をなだめ、すかして、き伏せた。婚式は、真昼に行われた。新郎新の、神々への宣誓がんだころ、が空を覆い、ぽつりぽつり雨が降り出し、やがてを流すような大雨となった。祝宴に列席していた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それでも、めいめい持を引きたて、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのも(こら)え、に歌をうたい、手を拍(う)った。

メロスも、面に喜色を湛(たた)え、しばらくは、王とのあの束をさえ忘れていた。祝宴は、夜に入っていよいよ乱れやかになり、人々は、外の豪雨を全くにしなくなった。メロスは、一生このままここにいたい、と思った。この佳い人たちと生涯暮して行きたいとったが、いまは、自分のからだで、自分のものではない。ままならぬ事である。メロスは、わが身に鞭打ち、ついに出を意した。あすの日没までには、まだ十分のがある。ちょっと一眠りして、それからすぐに出しよう、と考えた。そのには、雨も小降りになっていよう。少しでも永くこの家に愚愚とどまっていたかった。メロスほどの男にも、やはり未の情というものは在る。今宵呆然、喜にっているらしい花嫁に近寄り、「おめでとう。私は疲れてしまったから、ちょっとご免こうむって眠りたい。眼がめたら、すぐに市に出かける。大切な用事があるのだ。私がいなくても、もうおまえにはしい亭主があるのだから、して寂しい事はい。おまえの兄の、一ばんきらいなものは、人を疑う事と、それから、嘘をつく事だ。おまえも、それは、知っているね。亭主とのに、どんな秘密でも作ってはならぬ。おまえに言いたいのは、それだけだ。おまえの兄は、たぶんい男なのだから、おまえもそのりを持っている。」花嫁は、心地で首肯(うなず)いた。メロスは、それから花婿の肩をたたいて、「仕度のいのはお互さまさ。私の家にも、宝とっては、妹と羊だけだ。他には、何もい。全部あげよう。もう一つ、メロスの弟になったことをってくれ。」花婿は揉(も)み手して、てれていた。メロスは笑って村人たちにも会(えしゃく)

して、宴席から立ち去り、羊小屋にもぐり込んで、死んだように深く眠った。眼がめたのは翌日の薄明のである。メロスは跳ね起き、南三、寝したか、いや、まだまだ大丈夫、これからすぐに出すれば、東の刻限までには十分に合う。きょうは是非とも、あの王に、人の信の存するところをせてやろう。そうして笑って礫の台に上ってやる。メロスは、悠々と身仕度をはじめた。雨も、いくぶん小降りになっている子である。身仕度は出来た。さて、メロスは、ぶるんと腕を大きく振って、雨中、矢の如く走り出た。私は、今宵、される。されるに走るのだ。身代りの友を救うに走るのだ。王の奸佞(かんねい)邪智を打ち破るに走るのだ。走らなければならぬ。そうして、私はされる。若いから名誉を守れ。さらば、ふるさと。若いメロスは、つらかった。度か、立ちどまりそうになった。えい、えいと大声げて自身を叱りながら走った。村を出て、野を横切り、森をくぐりけ、村に着いたには、雨も止(や)み、日は高くなって、そろそろ暑くなって来た。メロスは(ひたい)の汗をこぶしでい、ここまで来れば大丈夫、もはや故への未はい。妹たちは、きっと佳い夫になるだろう。私には、いま、なんのがかりもいだ。まっすぐに王城に行き着けば、それでよいのだ。そんなに急ぐ必要もい。ゆっくりこう、と持ちまえの(のんき)さを取り返し、好きな小歌をいい声で歌い出した。ぶらぶらいて二里行き三里行き、そろそろ全里程の半ばに到した、降って(わ)いた、メロスの足は、はたと、とまった。よ、前方の川を。きのうの豪雨で山の水源地は(はんらん)し、流(だくりゅう)滔々(とうと

う)と下流に集り、猛一にを破し、どうどうときをあげる激流が、木微(こっぱみじん)に桁(はしげた)を跳ねばしていた。彼は茫然と、立ちすくんだ。あちこちと眺めまわし、また、声を限りに呼びたててみたが、舟(けいしゅう)は残らず浪に浚(さら)われて影なく、渡守りの姿もえない。流れはいよいよ、ふくれ上り、海のようにになっている。メロスは川岸にうずくまり、男泣きに泣きながらゼウスに手をげて哀した。「ああ、(しず)めたまえ、荒れ狂う流れを！ は刻々にぎて行きます。太も既に真昼です。あれが沈んでしまわぬうちに、王城に行き着くことが出来なかったら、あの佳い友が、私のために死ぬのです。」流は、メロスの叫びをせせら笑う如く、ますます激しくり狂う。浪は浪をみ、き、煽(あお)り立て、そうしては、刻一刻と消えて行く。今はメロスも悟した。泳ぎ切るより他にい。ああ、神々も照あれ！ 流にもけぬとの大な力を、いまこそしてせる。メロスは、ざんぶと流れにびみ、百匹の大蛇のようにのた打ち荒れ狂う浪を相手に、必死の争を始した。身の力を腕にこめて、押し寄せき引きずる流れを、なんのこれしきと(か)きわけきわけ、めくらめっぼう子迅の人の子の姿には、神も哀れと思ったか、ついに愍(れんびん)を垂れてくれた。押し流されつつも、事、岸の木のに、すがりつく事が出来たのである。ありがたい。メロスはのように大きな胴震いを一つして、すぐにまた先きを急いだ。一刻といえども、むだには出来ない。は既に西にきかけている。ぜいぜい荒い呼吸をしながらをのぼり、のぼり切って、ほっとした、突然、目の前に一の山がり出た。「

待て。」 「何をするのだ。私は沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。放せ。」 「どっこい放さぬ。持ちもの全部を置いて行け。」 「私にはいのちの他には何もい。その、たった一つの命も、これから王にくれてやるのだ。」 「その、いのちが欲しいのだ。」 「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたのだな。」 山たちは、ものも言わず一に(いっせいに)棍棒(こんぼう)を振り上げた。メロスはひょいと、からだを折り曲げ、の如く身近かの一人にいかかり、その棍棒をい取って、「の毒だが正のためだ！」と猛然一、たちまち、三人を殴り倒し、残る者のひるむ隙(すき)に、さっさと走ってを下った。一にをけ降りたが、流石(さすが)に疲し、折から午後の灼(しゃくねつ)の太がまともに、かっと照って来て、メロスは度となく眩(めまい)を感じ、これではならぬ、とを取り直しては、よろよろ二、三あるいて、ついに、がくりと膝を折った。立ち上る事が出来ぬのだ。天を仰いで、くやし泣きに泣き出した。ああ、あ、流を泳ぎ切り、山を三人もち倒し(うちたおし)天(いだてん)、ここまで突破して来たメロスよ。真の勇者、メロスよ。今、ここで、疲れ切ってけなくなるとは情い。する友は、おまえを信じたばかりに、やがてされなければならぬ。おまえは、稀代(きたい)の不信の人、まさしく王の思う(つぼ)だぞ、と自分を叱ってみるのだが、全身萎(な)えて、もはや芋虫(いもむし)ほどにも前かなわぬ。路傍の草原にごろりと寝ころがった。身体疲すれば、精神も共にやられる。もう、どうでもいいという、勇者に不似合いな不腐(ふてくさ)れた根性が、心の隅

にった。私は、これほど努力したのだ。束を破る心は、みじんもかった。神も照、私は精一ぱいに努めて来たのだ。けなくなるまで走って来たのだ。私は不信の徒ではない。ああ、できる事なら私の胸を截(た)ち割って、真の心をお目にけたい。と信の血液だけでいているこの心をせてやりたい。けれども私は、この大事なに、精も根も尽きたのだ。私は、よくよく不幸な男だ。私は、きっと笑われる。私の一家も笑われる。私は友を欺(あざむ)いた。途中で倒れるのは、はじめから何もしないのと同じ事だ。ああ、もう、どうでもいい。これが、私の定った命なのかも知れない。セリヌンティウスよ、ゆるしてくれ。君は、いつでも私を信じた。私も君を、欺かなかった。私たちは、本当に佳い友と友であったのだ。いちどだって、暗い疑惑のを、お互い胸に宿したことはかった。いまだって、君は私を心に待っているだろう。ああ、待っているだろう。ありがとう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それを思えば、たまらない。友と友のの信は、この世で一ぱんるべき宝なのだからな。セリヌンティウス、私は走ったのだ。君を欺くつもりは、みじんもかった。信じてくれ！私は急ぎに急いでここまで来たのだ。流を突破した。山のみからも、するりとけて一にをけ降りて来たのだ。私だから、出来たのだよ。ああ、この上、私に望みうな。放って置いてくれ。どうでも、いいのだ。私はけたのだ。だらしがいい。笑ってくれ。王は私に、ちょっとおくれて来い、と耳打ちした。おくれたら、身代りをして、私を助けてくれると束した。私は王の卑劣を憎んだ。けれども、今になってみ

ると、私は王の言うままになっている。私は、おくれて行くだろう。王は、ひとり合点して私を笑い、そうして事もく私を放免するだろう。そうなったら、私は、死ぬよりつらい。私は、永に切者だ。地上で最も、不名誉の人だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と一に死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがいない。いや、それも私の、ひとりよがりか？ ああ、もういっそ、者として生き伸びてやろうか。村には私の家がある。羊も居る。妹夫は、まさか私を村から追い出すような事はしないだろう。正だの、信だの、だの、考えてみれば、くだらない。人をして自分が生きる。それが人世界の定法ではなかったか。ああ、何もかも、ばかばかしい。私は、い切り者だ。どうとも、手にするがよい。やんぬる哉(かな)。——四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまった。ふと耳に、潺潺(せんせん)、水の流れる音がえた。そっとをもたげ、息をんで耳をすました。すぐ足もとで、水が流れているらしい。よろよろ起き上って、ると、岩の裂目から々(こんこん)と、何か小さく(ちいさく)(ささや)きながら清水がき出ているのである。その泉に吸いまれるようにメロスは身をかがめた。水を手で掬(すく)って、一くちんだ。ほうとい溜息が出て、からめたようながした。ける。行こう。肉体の疲(ひろう)恢(かいふく)と共に、わずかながら希望が生れた。遂行の希望である。わが身をして、名誉を守る希望である。斜は赤い光を、々のに投じ、も枝も燃えるばかりにしている。日没までには、まだがある。私を、待っている人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれ

ている人があるのだ。私は、信じられている。私の命などは、ではない。死んでおび、などとのいい事は言って居られぬ。私は、信にいなければならぬ。いまはただその一事だ。走れ！メロス。私は信されている。私は信されている。先刻の、あの魔のきは、あれはだ。いだ。忘れてしまえ。五が疲れているときは、ふいとあんないをるものだ。メロス、おまえのではない。やはり、おまえは真の勇者だ。再び立って走れるようになったではないか。ありがたい！私は、正の士として死ぬ事が出来るぞ。ああ、が沈む。ずんずん沈む。待ってくれ、ゼウスよ。私は生れたから正直な男であった。正直な男のままにして死なせて下さい。路行く人を押しのけ、跳(は)ねとばし、メロスはいのように走った。野原で酒宴の、その宴席のまっただ中をけけ、酒宴の人たちを仰天させ、犬を蹴(け)とばし、小川をび越え、少しずつ沈んでゆく太の、十倍も早く走った。一の旅人と(さ)っとすれちがった瞬、不吉な会を小耳にはさんだ。「いまごろは、あの男も、磔にかかっているよ。」ああ、その男、その男のために私は、いまこんなに走っているのだ。その男を死なせてはならない。急げ、メロス。おくれてはならぬ。との力を、いまこそ知らせてやるがよい。なんかは、どうでもいい。メロスは、いまは、ほとんど全裸体であった。呼吸も出来ず、二度、三度、口から血がき出た。える。はるか向うに小さく、シラクスの市の塔楼がえる。塔楼は、夕を受けてきらきら光っている。「ああ、メロス。」うめくような声が、と共にえた。「だ。」メロスは走りながらねた。「フィロストラトスでございま

す。方のお友セリヌンティウスの弟子でございます。」その若い石工も、メロスの後について走りながら叫んだ。「もう、目でございます。むだでございます。走るの、やめて下さい。もう、あの方(かた)をお助けになることは出来ません。」「いや、まだは沈まぬ。」「ちょうど今、あの方が死刑になるところです。ああ、あなたはかった。おうらみ申します。ほんの少し、もうちょっとでも、早かったなら！」「いや、まだは沈まぬ。」メロスは胸のり裂ける思いで、赤く大きい夕ばかりをつめていた。走るより他はい。「やめて下さい。走るの、やめて下さい。いまはご自分のお命が大事です。あの方は、あなたを信じて居りました。刑に引き出されても、平でいました。王が、さんざんあの方をからかっても、メロスは来ます、とだけ答え、い信念を持ちつづけている子でございます。」「それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。に合う、に合わぬはでないのだ。人の命もでないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののに走っているのだ。ついて来い！フィロストラトス。」「ああ、あなたはが狂ったか。それでは、うんと走るがいい。ひょっとしたら、に合わぬものでもない。走るがいい。」言うにや及ぶ。まだは沈まぬ。最後の死力を尽して、メロスは走った。メロスのは、からっぽだ。何一つ考えていない。ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走った。は、ゆらゆら地平に没し、まさに最後の一片の残光も、消えようとした、メロスは疾の如く刑に突入した。に合った。「待て。その人をしてはならぬ。メロスがって来た。東のとおり、い

ま、って来た。」と大声で刑の群にむかって叫んだつもりであったが、喉がつぶれて嘎(しわが)れた声が幽(かす)かに出たばかり、群は、ひとりとして彼の到着にがつかない。すでに磔の柱が高々と立てられ、を打たれたセリヌンティウスは、徐々にり上げられてゆく。メロスはそれを目して最後の勇、先刻、流を泳いだように群をきわけ、きわけ、「私だ、刑吏！されるのは、私だ。メロスだ。彼を人にした私は、ここにいる！」と、かすれた声で精一ぱいに叫びながら、ついに磔台にり、り上げられてゆく友の足に、(かじ)りついた。群は、どよめいた。あっぱれ。ゆるせ、と口々にわめいた。セリヌンティウスのは、ほどかれたのである。「セリヌンティウス。」メロスは眼にを浮べて言った。「私を殴れ。ちから一ぱいにを殴れ。私は、途中で一度、いをた。君が若(も)し私を殴ってくれなかったら、私は君と抱する格さえいのだ。殴れ。」セリヌンティウスは、すべてを察した子で首肯(うなず)き、刑一ぱいにりくほど音高くメロスの右を殴った。殴ってからしく(やさしく)微笑(ほほえ)み、「メロス、私を殴れ。同じくらい音高く私のを殴れ。私はこの三日の、たった一度だけ、ちらと君を疑った。生れて、はじめて君を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱できない。」メロスは腕に(うな)りをつけてセリヌンティウスのを殴った。「ありがとう、友よ。」二人同に言い、ひしと抱き合い、それから嬉し泣きにおいおい声を放って泣いた。群の中からも、歎(きよき)の声がえた。暴君ディオニスは、群の背後から二人のを、まじまじとつめていたが、やがて静

かに二人に近づき、をあからめて、こう言った。「おまえらの望みは叶(かな)ったぞ。おまえらは、わしの心になったのだ。信とは、して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしをも仲に入れてくれまいか。どうか、わしのいをき入れて、おまえらの仲の一人にしてほしい。」どっと群のに、声が起った。「万、王万。」ひとりの少女が、(ひ)のマントをメロスに捧げた。メロスは、まごついた。佳き友は、をきかせて教えてやった。「メロス、君は、まっぴだかじゃないか。早くそのマントを着るがいい。この可愛い娘さんは、メロスの裸体を、皆にられるのが、たまらなく口惜しいのだ。」勇者は、ひどく赤面した。100Test 下载频道 开通，各类考试题目直接下载。详细请访问 www.100test.com